



Jul. | 2024
沖縄開教本部通信
vol.112



ハイサイ 沖縄

「ジュリの真宗信仰」②

琉球大学大学院修士課程

源 清香

みなもと さやか

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと

第一回目では、浄土真宗が禁教であった近世の琉球において、門徒の大多数を占めた辻村（以降、辻）のジュリ（遊女）がどのような人々であったのか、また辻と真宗の接点についてご説明しました。第二回目の今回は、大谷派の僧侶たちが布教にやってくる以前の、ジュリたち琉球門徒の信仰の様子について見ていきます。

真宗禁制下の琉球では長らく、門徒たちは真宗寺院や真宗僧との直接的な関わりを持ちえませんでした。琉球門徒の存在が史料上で初めて確認できるのは十八世紀半ばであり、大谷派の僧侶が琉球で布教活動を始めるのは一八七六年のことです。つまり、この百年あまりの間は、在家のみの信仰であったということになります。

この間、門徒たちは在家の指導者を中心に講を結成して本尊を拝したり、時に薩摩の船乗りを介して西本願寺と懇志上納や本尊下付等のやり取りを行ったりすることで、信仰を維持してきました。

では、具体的にその日々の信仰とどのようなものであったのでしょうか。その一端がうかがえる、辻を拠点にジュリ等門徒を率いた在家の

指導者備瀬知恒の供述をみてみましょう。

【史料】

「始末書」

備瀬知恒の供述（抜萃）

信仰向ノ儀常式ハ、毎日程おほく相備ひ拝ミ候面々ハ参銭三文宛差上又候何歟願事之節ハ志銭ト申式三貫文或ハ四五貫文差上、且十一月廿八日ハ開山親鸞聖人、三月廿五日ハ中興之仏蓮如上人遷化ノ日ニテ、毎月右ノ日々ハ右銭を以菓子杯相調、差上、且十一月廿一日より開山親鸞聖人病氣相煩たる由ニテ、右日より遷化ノ日廿八日迄拝居候面々式三貫文或ハ四五貫文志銭差進候得ハ、菓子相調、差上致吊、尤拝ミ候面々寄合ノ砌書籍ノ意味読聞せ、右仏致信仰候ハ、幸を得後生極楽いたし候次第等断聞為申由（注）

これによると、まず、日々「おほく」つまり御仏供を供えて本尊を拝する者は参銭三文、何か「願事」がある時には志銭二〜五貫文を献納していたことが分かります。そして、親鸞と蓮如の月命日である、毎月二十八日と二十五日には寄り集まって、参銭志銭で菓子等を準備し供えています。また毎年、親鸞が病を

煩った日として十一月二十一日から遷化の日の二十八日までの期間、月命日と同様に同行らで弔っています。これは、玉代勢法雲氏によると、報恩講のつもりで催した特別集会で、備瀬が説教法談を行ったといえます。その他にも、備瀬は門徒たちの寄合の際には、「書籍」つまり經典や聖典の意味を読み聞かせ、真宗を信仰したら「幸を得後生極楽」する等のはなしを行っていました。

このように当時の辻では、寄合を以て本尊礼拝や在家の指導者による説教を聴くことで、真宗を信仰していました。一方で、本格的な仏事の勤修等は見られません。では、いわばこの道の専門家である僧侶の来琉は、琉球門徒の信仰に何か変化をもたらしたのでしょうか。第三回は、大谷派僧来琉後の真宗信仰について見ていきたいと思います。

（注）「始末書」は第三次真宗法難事件で検挙された門徒の尋問調書で、『沖縄県史』第十二巻資料編二「沖縄県関係各公文書1（琉球政府、一九六六年）、二六七〜三〇四頁に所収。当該抜箇所は二七二頁。「始末書」は略称で、正式名称は「琉球藩ニ於テ管下人民真宗信仰ノ者ヲ私ニ処刑セシニ付処分ノ件」のうち「第二付属書3―真宗信仰向之者共処分始末書」。

―参考文献―

- ・ 知名定寛『琉球沖縄仏教史』
（榕樹書林、二〇二二年）
- ・ 玉代勢法雲『真宗法難史』
（布哇佛教会、一九二八年）

『ハイサイ沖縄』5月号
表面の参考文献紹介

- ・知名定寛『琉球沖繩仏教史』（榕樹書林2021年）
- ・伊波普猷「ジュリの歴史」（『琉球女性史』、小澤書店、1919年）
- ・『那覇市史 資料篇第2巻中の7 那覇の民俗』（那覇市企画部市史編集室、1970年）
- ・外間米子「チージ（辻遊郭）」（那覇市総務部女性室、那覇女性史編集委員会議編『なは・女のあし

あと那覇女性史（近代編）』、ドメス出版、1998年）

- ・麻生清香「明治期の辻遊郭の諸相―近世琉球からの連続と変化を中心に―」
- ・渡辺美季「近世琉球の女性像―王府と外国人の語る「女性」―」
- ・真栄平房昭「女性史からみた薩摩と琉球の関係」（『沖縄県史 各論編 第八巻 女性史』、沖縄県教育委員会、2016年）

沖繩教化拠点何我寺

報恩講厳修

五月十九日（日）、読

谷村の教化拠点である何我寺（ぬーがじ）で報恩講を行いました。天候にも恵まれ、日曜日の午前中ではありましたが、多くの方に足を運んでいただき大変ありがたかったです。ご法話いただいた福井県福円寺の藤共生先生には、「仏教にあまり触れて

こられなかった沖縄に住む方向けに」というお話をさせていただき、これを機にまたお話を聞きたいとおっしゃる方もあり、今後の開催が楽しみです。
また今回、彫刻家で琉球親鸞塾代表の金城実先生に、親鸞像の製作をしていただきました。報恩講に来てくれた子供たちには、その制作のお手伝いをしていただきました。将来、何我寺に参拝した時に、お寺に親しめるきっかけになることを期待しています。



知花昌一氏（何我寺）

ご縁のあったすべての方のご尽力で、大変盛大に報恩講が行う事ができ、深く感謝申し上げます。これからも灯りが途絶えぬようにご縁を紡いでまいりますと思えます。
（報告 知花一盛・読谷村大谷派教師）



「親鸞聖人像」金城実作



「見えないもの」

饒波 聖（のはひじり）

沖繩別院法務員・沖縄県恩納村出身

私は今年の3月に、京都の大谷専修学院を卒業し、現在、東本願寺沖繩別院で法務員を務めさせていただいております。

仏教・親鸞聖人の教えを学び、私の中で大きな変化がありました。昨今、災害や戦争など悲しい出来事がメディアにより報じられ、私は映像を見て知ることができません。しかし世界には私の知ることのできない所で、今この瞬間にも悩み苦しんでいる人たちがいて、今この瞬間にも命終わる人がいる。自ら命を絶つ人がいる。そして他の命を奪おうとしている人がいる。その人たちにとっての救いとはなんでしょう。

普段生活していく中で、今の私は問題が起きてても自分で善悪を決め行動しています。しかし自力で超えることのできない問題が起こったら何を頼るのか、何をよりどころにするのか、「念仏ただ一つ」だと私は受け止めました。

悲しみは悲しみでしか救えない。しかし私が悲しんでいる人にできるのは同情でしかありません。悲しみ、苦しみを抱えている人が、念仏を称え、世間の中で同じように苦しみ悩んで念仏を称えている人たちと繋がり、想いの中で出遇い感じることができればと思います。

信じる事はとても難しいですが、親鸞聖人をはじめ、念仏をしてきた方々があり、その人々が「大丈夫」と語りかけてくれるのだと私は受け止めています。これからも多くの人々と出会い、会話を通し、聞思し続けていきます。